

小西甚一著「俳句の世界」講談社学術文庫、講談社 1995年1月10日刊を読む

俳句は文藝なり

1. 世人は、ともすれば、子規の俳句革新を写実精神の振興のみから論じたがる。しかし、わたくしは、それよりも、かれが「俳句は文藝なり」と提唱したことを、ずっと重視したい。
2. 28年3月、従軍記者として大陸へ出発した子規は、帰途、5月に再喀血して重態となり、須磨で保護し、8月末からしばらく松山に帰ったさい、その地の人たちに俳句を説いた。それが、後に『俳諧大要』としてまとめられた。そのなかに、
俳句は文学の一部なり。文学は美術の一部なり。故に美の標準、文学の標準なり。文学の標準は俳句の標準なり。即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も、皆同一の標準を似て論評し得べし。
とあるのは、重要な発言である。
3. 美術とは、いまの藝術に当たる。文学とは、もちろん *literature* の訳語だが、江戸時代は作品としての *literature* に当たる概念が無く、明治になって、西周^{あまね}や田口卯吉の啓蒙的著述を通じ初めて西洋から受け入れたのである。
4. もっとも、英語の *literature* をこの意味に使った用例は、オックスフォード英語辞典によると、1812年が初出の由だから、無理もない。江戸時代にも『好色一代男』があり『心中天網島』があり『浮世床』があり『春色梅暦』があった。しかし、それらは、正式の藝術ではなく、戯作——桑原式のよびかたでは第二藝術——にすぎなかった。これに対して、和歌や俳諧は、とにかく第一藝術であった。ところが、作品としての *literature* の概念が渡米して、これまで第二藝術であったものが、逆に、第一藝術の地位を占め、第一藝術であった俳諧は、新時代に立ちおくれた第二藝術として置き去られてゆく形勢となった。
5. 子規の宣言は、俳諧のうち、発句は人の感情を表現するものだから小説や戯曲と同じく美術(第一藝術)だとし、連句は知的な遊びだから文藝にあらずとした。したがって俳句と改称された発句は、特定の閉鎖された世界のなかだけで通用する「あそび」ではなく、世界ぜんたいに向って開放された真実探求の路であることの宣言なのである。写実的態度は、そのために採られた「方法」にほかならない。根本は、近代的な第一藝術への質的転換に在る(21-22 ページ参照)。単に「発句」から「俳句」へと名義変更しただけのことではない。子規による俳句革新の中心点は、まったく *literature* への質的転換に存するといつてよろしい。

P258 ~ 260

<コメント>

正岡子規の俳句革新の最大の貢献は、「俳句は文藝なり」と提唱したことであるという小西甚一先生の考えに全面賛成。子規により俳句は「文藝」つまり、日本の文化に昇華されたと考える。俳句の最高 松尾芭蕉についての記述も圧巻。ぜひ御一読を。

2019年7月3日(水)

林 明 夫